

【評価基準】 2.5～3：適切、2.0～2.5：ほぼ適切、1.0～2.0未満：やや不適切、1.0未満：不適切

	項目	評価 令和5年度	令和4年度
I	教育理念・教育目的	評価点 2.9(適切)	評価点 2.7(適切)
	教育理念、教育目的	昨年度より平均は0.2上昇。看護師養成所のカリキュラム内容及び当校の目指す看護師像が盛り込まれ、そこに向けて学習できる内容である。教育活動の中で内容を伝えており、学生も専門的な知識や技術と人格を伴った看護師像を意識している。卒業前アンケートや基礎看護技術到達度評価等で看護基礎教育修了時に必要な資質の評価を行い、地域社会に貢献できる人材という部分で市立の学校としての目的を踏まえている。	
II	教育目標	評価点 2.9 (適切)	評価点 2.8(適切)
	教育目標	昨年度より平均は0.1上昇。豊かな人間性・基礎的能力・地域のニーズ・多職種連携・探求性について明示しており、教育理念に基づき教育目的を達成するための教育実践につながる目標は具体的で適切である。	
III	教育課程	評価点 2.7(適切)	評価点 2.5(適切)
	教育課程 教育課程評価 教員の教育活動の充実 学生の看護実践体験の保障	・昨年度より平均は0.1～0.5上昇。教育課程経営は、教育理念・教育目標を達成するために教育計画・シラバス・学生便覧に指針を明示している。教育課程は基礎科目から専門科目にわたり系統立てて学べるよう構成され、各学年の時間割にも反映されている。 ・本年度は4人の新人専任教員及び実習指導教員を迎え運営上の人員を確保し、新しいキャリアでの力を発揮できるよう講義・実習指導・校務分掌に先輩教員の指導支援を得られるような相談体制を促進した。 ・教員の研究授業の時間確保が困難な状況であり、授業準備はほぼ自宅持ち帰りである。授業以外の業務も逼迫しており、勤務時間内での十分な授業準備の時間確保は厳しい状況にある。人材充実によりやや緩和されたが、実習指導は張付き指導を要することが多く、特に演習準備等は教員間の協働により教育内容の充実に努めた。 ・新人教員は授業時間数を軽減し、授業計画指導を行い、ある程度の段階的な授業準備体制を保障できたと考える。 実習場にいる教員は勤務時間内に授業準備をすることは不可能な状況であり、改善策を講ずる必要がある。 ・相互研鑽システムは、チームティーチングや授業見学等を中心に授業内容について教員相互で個々に話し合い、教育会議や実習リフレクション等で検討、課題解決に取り組んでいる。校外研修はラダーを基本に計画的に参加し還流報告により情報共有した。校内職員研修で各領域の看護過程指	

		導方法について学習し、評価と教育方法改善につなげている。本年度新人教員研修の一環として研究授業を実施したが、即時のリフレクションができず、3月の教育会議で検討予定であるが、継続的に全職員が取り組む研究授業の計画を検討する必要がある。 ・カリキュラム改正により地域の新たな実習施設での実習が開始したが、事前調整や教員実務研修等を計画的に行い、学生の実習環境整備に取り組んだ。一方既存施設も状況により学習支援体制が不十分な場合もあり、教員のより一層の調整を要している。臨床での倫理・安全教育は重視しタイムリーに行い理解を深めさせている。 ・本年度卒業生は旧カリキュラム最終年度であった。全員が必要単位修得して卒業したが、国家試験の合格率は全国的にも過去最低水準となり、本校においても1名の不合格者が出た。引き続き学習支援に関わり来年合格できるようサポートする。 卒業時アンケート等の評価により課題を明確にし、カリキュラム運用に反映させる。	
IV	教授・学習・評価過程	評価点 2.7(適切)	評価点 2.5(適切)
	授業内容間の関連と発展 授業展開 教員間の協力 評価とフィードバック 学習の動機づけと支援	・昨年度より平均は0.1～0.3上昇。各自授業計画に基づいて準備・教授から評価まで行っている。学生の学習状況を確認しながら授業・実習等を進め、必要時、個別指導を行っている。学生からの意見をもとに、次年度の授業構築に活用している。講師会議で教育学の専門家に評価に関する講演を依頼し、教員・非常勤講師共に学習の機会を得た。基礎看護学実習及び看護技術試験の一部にパフォーマンス評価を活用し実践能力向上に活かした。 ・カリキュラム改正に伴い、1・2年生は効果的な評価方法へと改善を図った。模擬試験結果等で旧カリキュラム生との優位差は見られず、実質的な知識の定着となるよう継続的に工夫していく必要がある。 ・2年次履修の地域・在宅看護方法論において、他職種によるノーリフトケアに関する講義・演習を取り入れた。1年次基礎看護学「活動」から発展した援助を受ける人も援助者も安全で安楽な日常生活援助技術に学生の関心は高く理解も深まった。 ・コロナ禍による行動制限が緩和され、授業・演習・臨地実習もほぼ通常の形で実施できるようになり、特に実習は臨地ならではの対象との関りや臨床判断、看護技術実践等と体験の学びを深める機会を得た。 ・国家試験対策においては、1年次からの個別に応じた学習支援や段階的模擬試験実施、3年次自己学習確認や夏季休業期間のチューター制指導、実習終了後はレベル別に複数教員で個別指導、グループ学習等の対策を行ったが、3年次時点で学習方法が分からないという学生もあり、入学時からの綿密な計画の課題が再確認された。	

V	経営・管理過程	評価点 2.7(適切)	評価点 2.5(適切)
	組織体制 財政基盤 施設設備 学生生活の支援 情報提供 運営計画と将来構想	・昨年度より平均は同点～0.3 上昇。 ・学校の情報は保護者会、高校訪問、指導者会議、講師会議、広報誌、HP 等で関連する人々へ学校や学生の状況を伝え、学校経営に反映させている。 ・運営ガイドにて学校の目標が提示され、各教員の役割も提示されている。カリキュラム改正に伴い推進チームを中心にカリキュラム評価を行い、教育計画改善などに繋げた。ICT 教育は推進チームを中心に令和 7 年度からの電子書籍導入を目指し具体的計画準備に向けて調査や調整中である。学生の連絡や会議の DX 化も試行中である。 ・自己点検・自己評価は年 1 回実施。新任教員は 10 月に中間評価を含め 2 回実施し不明瞭な点には説明補足を行い新しい視点を経営に活かすようにした。評価視点の解釈が各教員により異なることがないよう共通認識の必要性が明確となった。 ・校務分掌は始期目標立案、中間・最終評価を実施し、市の人事評価は上期・下期目標立案、上期末・下期末評価を実施し、自己点検・自己評価に反映させている。校務分掌マニュアルの見直しや改善を行い引き継いでいる。 ・学習環境は建物の老朽化や空調設備故障に対し現状を工夫してきたが、市の長期改修計画により段階的に改善が見込まれる。 ・令和 4 年度に作成した学校防犯マニュアルによりオリエンテーションや講習会等防犯管理の充実により安全な学校環境を整備した。 ・令和 5 年度 10 月にハラスメント防止に関するガイドラインを作成活用し、研修や評価によりハラスメント防止の意識高揚と行動化につなげ、学生及び教職員のより良い学びや勤務の環境作りを促進した。 ・心理的、経済的に困難のある学生に早期に気づき個別指導やカウンセラーとの連携、奨学金等の紹介により就学支援に繋げた。	
VI	入学	評価点 2.8(適切)	評価点 2.7(適切)
	入学者選抜 入学状況、入学者の 推移	・昨年度より平均は 0.1 上昇。推薦入試及び社会人入試の定着と学校訪問等により、入学者の定員確保は継続して行えている。ただし、入学後の進路変更や指定校推薦入学者の基礎学力不足が問題となっている側面もあり高校との連携等の対策を講じる必要性は強くなっている。	
VII	卒業・就職・進学	評価点 2.6(適切)	評価点 2.2 (ほぼ適切)
	卒業時の到達状況 就業・進学 卒業生の把握	・昨年度より平均は 0.4 上昇。学生への学校評価アンケートや成績状況から卒業時の到達状況を把握している。 ・厚労省委託外部団体によるキャリアアップ研修や卒業時技術演習を行い、リフレクションでは看護師としてスキルを磨き貢献したいなどの意見があり、就職に向けた意識付けができた。 ・今年度卒業生は市内就職約 6 割、県内約 8 割と地域定着率は過去最高に	

		向上した。就職支援相談体制を市教委を通して弁護士等の助言も得て工夫し、学校説明会や広報活動、在校生や卒業生のつながりも成果を導いた。 ・一方市立校として市内や地域に貢献できる看護師の育成を目指していることを学生に日ごろから周知し、帰属意識を喚起し、入試形態などで人材確保のための対策を講じているが、県外就職希望の学生や推薦入試で入学しても市内にとどまらない学生も少なからずおり、高校や保護者との連携を図る必要がある。 ・指定校推薦枠や社会人枠導入開始時の令和3年度から比較すると市内就職割合は上昇してきており効果は認められより適切な説明による看護教育校の認知向上につなげる必要がある。	
VIII	地域社会・国際交流	評価点 2.3(ほぼ適切)	評価点 2.2(ほぼ適切)
	地域との連携と社会への貢献 国際的な視野を広げるための授業や環境整備	・昨年度より平均は 0.1～0.2 上昇。文化人類学では異文化講師による台湾文化に触れ、非常に好評である。異文化交流は新カリキュラムでは3年次に計画しており本年度は実施していない。米国人による英会話、大学の国際交流センター長(教授)による英語絵本の多読、医療英会話教育等にはアクティブに楽しく取り組んでいる。昨今の世界規模の紛争や災害ニュースにも SHR 等で触れ、学生の国際的視野拡大を意識した教育を行っている。 ・地域社会においては、昨年度から名称変更した地域・在宅看護論実習や特別教育活動を更に充実させ、地域理解を深める機会となった。学校祭は4年ぶりに市民を迎え、クラスマッチ時の市街環境美化活動、3年生は卒業前地域ボランティア活動を行い地域との関りを振り返る機会となり、改めて市に感謝する声も聞かれた。 ・コロナ感染対策が緩和され、防災ボランティア等にほとんどの学生が参加し、地域交流と新たな学びの機会を得た。 ・卒業生が学校へ訪問する機会も増え、卒業後の状況や当校の技術を重視した教育内容が就業をスムーズにさせているなどの意見を聞くことができた。在校生への卒業生の状況の情報提供により就職先や今後の目標の指針となった。 ・教員はコンチネンス協会講師や手術看護認定看護師の資格を活かした講演や支援活動、異文化の子どもと家族への健康教育等の地域貢献も積極的に担い学生のモデルとなるべき活動をしている。	
IX	研究	評価点 2.2(ほぼ適切)	評価点 1.7(やや不適切)
	教員の研究活動の充実	・昨年度より平均は 0.6 上昇。研究活動を行うにあたっての時間確保や相談役の確保、予算等の環境整備が不十分である。 ・新カリキュラムの看護研究担当講師から教員の研究活動が提案されたことにより、学内倫理審査委員会を立ち上げ、担当者を中心に臨地実習指導に関する研究に取り組み、令和6年9月に看護研究学会で発表予定である。今回着手中の看護教育研究過程の評価を行い、研究に価値を置き教員	

		相互に支援し合う文化的素地や、人材、時間、財政、環境を整備させていく必要がある。
--	--	--